

— 近江八幡・家政塾とアメリカ人宣教師達について —

文教大 女子短大 川崎 矜子

目的 前報に続き近江ミッションを背景にして吉田清野が1933年に創設した近江家政塾の果たした役割を考察した。特に今回はアメリカ人宣教師達が家政塾創立の過程において生活意識・態度などの面での与えた影響に着目し、それらの意義について論ずることとした。

方法 資料の収集にあたっては、近江ミッション（現近江兄弟社）発行の雑誌・機関紙・文献などを基盤にした。さらに関係者へのインタビューも回を重ねて行った。

結果 1905年に米国の英語教師、そして宣教師でもあったウィリアム・メレル・ヴォーリズは来日した。2年後に解職されるや否やすぐに吉田悦蔵と二人で近江ミッションを設立した。近江ミッションには様々な外人宣教師が関わりをもち、当時の人々には珍しい西洋式の生活を紹介した。キリスト教の布教とともに、それらは生活改善の意欲とも重なり、日本人の生活意識を大きく変えた。家庭運営や家事の中に合理的、科学的な態度を持ち込んで、新しい息吹を注ぎ、人々に生活向上の目を開かせた。吉田清野は悦蔵と結婚して八幡の人となる以前の9年間は水戸の宣教師ピンフォード夫妻のもとで修養を受けていた。ピンフォード夫妻は1899年に来日し、水戸を中心に熱心に布教をおこない、多くの人材を輩出した。夫人は、水戸の女性に西洋料理、西洋洗濯法、洋裁、収納法など家事全般にわたっての知識・技術を伝えた。これらは、そっくり清野に継承されて、家政塾の教育の中に生かされた。

家政塾は規模の拡大とともに教科の種類も増えたが、清野が実行した教育は単に教室での教授にとどまらず、清野の家庭を解放して、全生活を生徒達に示した。吉田邸は洋式生活のまさにモデルであった。